

部類	國
部冊	1
番號	12
	小12

尋常
小學
國語讀本
卷五

文部省

K130.8
3
5

部類	小
番號	八六八



癸亥年二月九日

〇、一五〇

尋常
小學

國語讀本

卷五



文部省

もくろく

一 大日本	一	十四 雨	五十
二 中村君	二	十五 養老	五十三
三 大蛇たいぢ	七	十六 日本三景	五十六
四 松太郎の日記	十二	十七 虹	六十
五 金鶏勲章	十七	十八 峠から町へ	六十三
六 鯉のぼり	二十	十九 用水池	六十八
七 大賣出し	二十二	二十 八幡太郎	七十九
八 ツバメ	二十五	二十一 水見舞	八十三
九 私のうち	二十七	二十二 郵便函	八十九
十 遠足	三十四	二十三 一足々々	九十五
十一 熊襲征伐	四十一	二十四 ブダウ	九十五
十二 一口話	四十五	二十五 熊のさ、やき	九十七
十三 蠶	四十六	二十六 東京停車場	百

大日本

大日本、大日本、

神のみすゑの天皇陛下

われら國民七千萬を

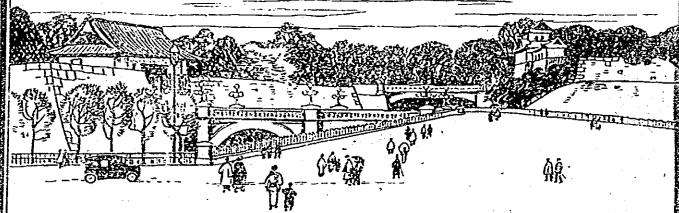
わが子のやうに

おぼしめされる。

大日本、大日本、

われら國民七千萬は

陛下
國民
七千
萬(万)



一 大日本

二 中村君

天皇陛下を神ともあふぎ、
おやともしたひてお仕へ申す。

大日本、大日本、

神代此の方一度もできに

負けたことなく、月日とともに、

國の光がかがやきまさる。

二 中村君

四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいて
ゐると先生が知らない生徒を一人つれて
お出でになりました。

「ここがあなたの教室です。せきはあれに
します。」

といつて、此の間からあいてゐたせきをお
さしになりました。さうして「山田さんとお
よびになりましたから、はい」と答へますと、
「此の方は中村さんといふ人で、今度遠い

二 中村君

級

君

所から来て、今日から此の級へはいる方
です。

とおつしやいました。又中村君には、

「これは級長の山田さんです。分らないこ
とは此の方におききなさい。」

とおつしやいました。私ども二人はていね
いにおじぎをしました。

中村君は色が黒くて、まるまると太つてゐ

冬

里

ます。氣がさつぱりしてゐて、二三日たつと、
前からの友だちのやうになりました。

中村君がこれまで居た所は日本の南の方
で、冬でもめつたに雪のふることがなく、う
めやさくらも、こちらよりはずつと早くさ
くさうです。何でも汽車に二日二ばん乗通
して、こちらへ着いたのださうですから、何
百里かはなれてゐるのでせう。こちらは今

さくらのさかりですが、あちらではもうと
うにちつてしまつたさうです。

ある日、僕がうんどう場へ出て見ると、中村
君が泣いてゐました。聞けば、級のものが二
三人で、中村君を生いきだといつて、いぢめ
たのださうです。僕は

「君、しつかりしたまへ。日本の男は泣くも
のではない。」

といつて、力をつけてやりました。中村君は
學問もよく出来るし、うんどうも上手です。
僕は自分よりえらい友だちを大ぜいして
いぢめるのは、男らしくないと思ひます。

三 大蛇たいぢ

あまてらすおほみかみ

天照太神の弟の方に、すさのをのみことと
申す神様がございました。ある時、出雲いづもの國
のひの川のはたをお通りになりますと、川

流

娘

三 大蛇たいぢ

上から箸^{はし}が流れて來ました。みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、だんだん山おくへおはいりになりますと、おぢいさんとおばあさんが、一人の娘を中において泣いてゐました。

「なぜ泣くか。」

とおたづねになりますと、おぢいさんが、



三 大蛇たいぢ

「私どもにはもと娘が八人ございました。それを八岐^{やまた}の大蛇^{をろち}が來て、毎年一人づつたべました。もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇がたべにまゐります。」

九

尾頭

生

酒

「どんな大蛇か。」

「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、目はほほづきのやうに赤く、せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。」

「よし。其の大蛇をたいぢしてやらう。強い酒をたくさんつくれ。」

とおいひつけになりました。

酒が出来ると、みことはそれを八つのをけ

待

飲

血切

に入れさせて、八岐の大蛇の来るのを待つていらつしやいました。

間もなく大蛇が来て、八つの頭を八つのをけに入れて、其の強い酒を飲みました。

飲みほして、大蛇がよひつぶれますと、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をずたずたにお切りになりました。ひの川が血になつて流れました。

尾をお切りになつた時、つるぎのはがこぼれました。ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出しました。これはめづらしいつるぎだ。自分の物にしてはならぬとおぼしめして、天照大神へお上げになりました。

四 松太郎の日記

四月二十一日 土曜 雨

記

北

今日から日記をつけることにしました。学校からかへつて見ると、廣田君からゑはがきが來てゐました。

北國にも春が來ました。うめやも、やさくらがみんな一しよにさいてゐます。これだけはお目にかけたいと思ひます。

と書いてありました。

晴

四月二十二日 日曜 晴

朝、おさらひをすましてから、春子とつくしをつみに行きました。かへりみちにはなれ馬がとんで來ましたので、どうしようかと思つてゐますと、よそのをぢさんが大手を廣げてとめて下さいました。

月

四月二十三日 月曜 晴

四月二十四日 火曜 晴

病

ぼちが昨日から病氣で、ごはんをたべませんので、學校に居てもしんばいでしたが、かへつて來ると、もうよくなつてゐて、尾をふつてむかへに出ました。

四月二十五日 水曜 曇

つゞり方の時間に、すゞめが教室の中へとびこみました。先生がまどをすつかり明けて、出しておやりになりました。

木 筆 金 海 葉

夕方から雨がふり出しました。

四月二十六日 木曜 雨

學校からかへつて、新しい筆で書き方の
おけいこをしました。

四月二十七日 金曜 晴

海軍のをちさんがお出でになつて、春子
にはゑ葉書とりボン、僕には小刀とえん
ぴつをおみやげに下さいました。

五 金鵒勲章

「をちさん、勲章がふえましたね。一番こつち
は金鵒勲章でせう。」

「あゝ、今度の戦争でいたゞいた。」

「金の鳥がついてゐますね。」

「これは鵒だよ。それで金鵒勲章といふのだ
が、鵒のついてゐるわけは知つてゐるだら
う。」



「いゝえ。」

「話して上げようか。」

「はい。」

むかし神武^{じんむ}天皇がわるものどもをごせい
ばつになつた時、わるものどもが強くて、お
こまりになつたことがある。其の時一天に
はかにかき曇つて、ひようがひどくふり出
すと、金色の鵄が一羽とんで来て、天皇のお

弓の先にとま
つた。鵄の光が
まるでいなび
かりのやうで、
わるものどもは目を明けてゐ
ることが出来ず、おそれてみん
なにげてしまつたさうだ。其の
いはれで、戦争の時、大きな手が



らを立てた軍人に下さる勲章に、金の鰯をおつけになつたのだ。

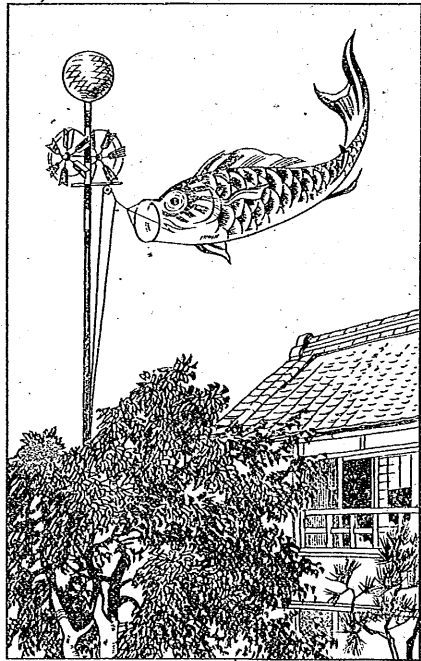
此の勲章には功一級から功七級まである。をぢさんのは。

をぢさんのは功七級だ。

六 鯉のぼり

ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくてつてゐます。さをの先の矢車ががら

がらと鳴ると、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。其の尾を下して来て、さをに着けるかと思ふと、又はらをふくらませて、をどり上ります。其のた



地

びに、鯉のかげが地の上をおよぎます。

七 大賣出し

廣告

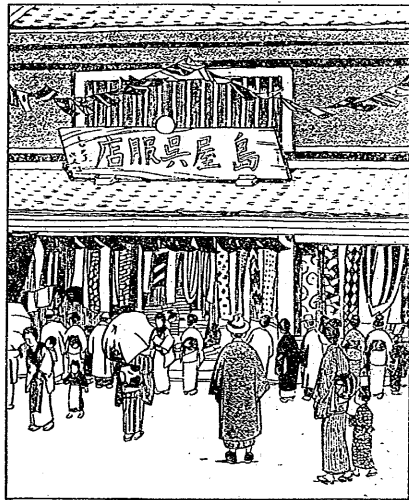
美しいびらで、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しはいよく今日からはじまりました。

おひるすぎおかあさんにつれられて、買物に行きました。島屋の前には、人が黒山のやうにあつまつてゐました。二かいのまどに

萬

聞

帶



萬國旗きがつるしてあつて、おくの方からたえずちくおんきの音が聞えて來ます。

下のかざりまどには、目のさめるやうなちりめんや、きれいな帶や、すゞしゆかたさうな浴衣地がかざつてあります。入口の左手には、小

下

切やえりや帯あげなどがたくさん下げてあつて、それを見てゐる人も大ぜいあります。

頭

注文

反

店の中へはいつて見ますと、番頭さんたちは、お客から注文をうけては、小ぞうさんたちにしずをしてゐます。小ぞうさんたちは、土ざうからいろくゝな反物や帯地をかついて来て、お客の前につみ上げます。しば

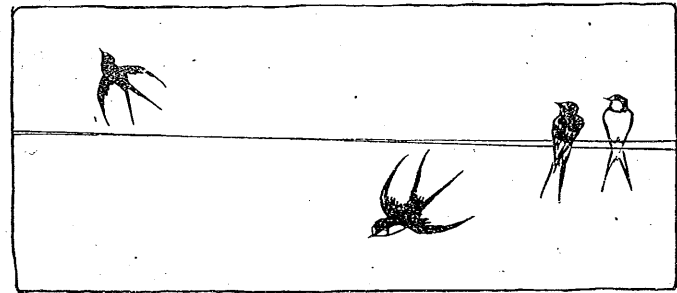
景

らく待つて、私どもは浴衣地とこんがすりを買つて外へ出ました。うちへかへつて、ふろしきを明けて見ましたら、店のしるしをついた手ぬぐひと物さしが景物にはいつてゐました。

ハ ツバメ

ツバメハトブコトが上手ナ鳥デ、ツブテノヤウニトシデ來テ、物ニツキアタルカト思

フト、カルクミヲカハシテ、矢
ヨリモ早クトンデ行キマス。
ガントオナジク、ワタリ鳥デ、
アタ、カニナツテ、ガンガ北
ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カ
ラワタツテ來マス。サウシテ
ダンく、スバシクナツテ、ガ
ンガソロく、ワタツテ來ル



作物

外

コロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。ツバメハ
コチラニ居ル間ニ、人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒ
ナヲソダテマス。

ツバメハ田ヤ畠ノ作物ニツク虫ヲ取ツテ
タベマスカラ、人ノヤクニ立ツ鳥デス。

九 私のうち

一

こんな所にと思ふやうな村外れに、家がー

庭

栗

けん立つてゐます。これが私のうちです。
それはくしづかな所で、風の音と水の音
より外には、何の音も聞えません。
庭さきのもみぢの木は、前の川に美しいか
げをうつしてゐます。
うら一めんの林は私のうちのもので、此の
ごろは栗の花がたくさんさいてゐます。
此の間町のをばさんがいらつしやつて、「こ

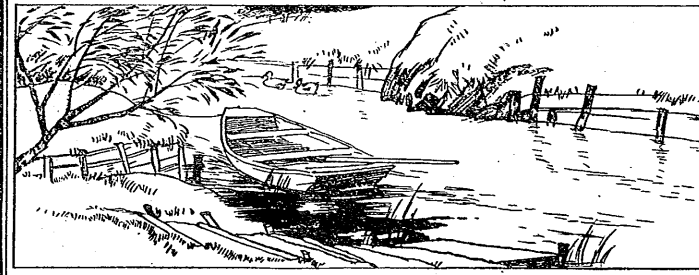
んなしづかな所でくらしてみたい。」とおつ
しやいました。

二

もえる木のめに春風吹けば、
うちのまはりのうめももさくら、
かはるぐに花さきみだれ、
人も來て見る、小鳥もうたふ。
うちの前には小川が流れ、

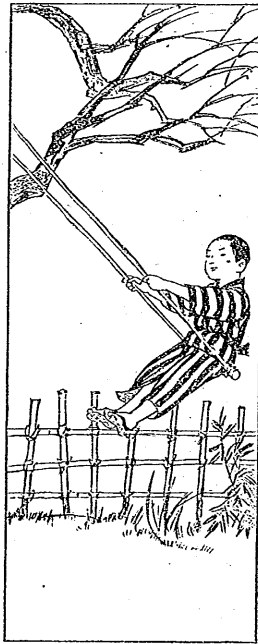
夏 時雨

舟もうかべば、あひる
 もうかぶ。
 つりも出来るし、およ
 ぎも出来て、
 あつい夏でもすゞし
 くくらす。
 つゆや時雨が色よく
 そめた



秋

うらの小山に秋風吹けば、
 木々のしづくもきのことなつて、
 はんのごはんのおかずにまじる。
 松をのこして木の葉がちれば、
 庭は一日日がよくあたる。



本のおさらひすました後は
枝につるしたぶらんこ遊。

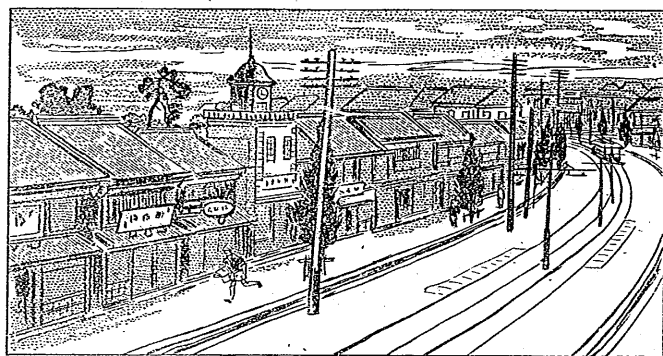
三

表
歩道

私のうちの表通は電車や自轉車てんが引切なしに通つて、りやうがはの歩道に人通のたえることがありません。
ある朝早く、おとうさんがたびへお立ちになつた時、お見送をして表へ出て見ました。

畫
聞

數



畫あれほどにぎやかな通に、新聞配達はいたちと四五人の人のすがたが見えるだけでした。此の時何の氣もなく自分のうちを見て、その小さいのにおどろきました。店客間・居間・勝手など、これで間數が七つもあるとは、

時計

どうしても思はれませんでした。せまい中庭から、屋根の上に頭を出してゐるひよろ松は、葉がほこりだらけでした。私のうちの右どなりは小間物屋で、左どなりは時計屋です。時計屋の前に電車の停留場があります。

十 遠足

「おかあさん、お天気は。」

起

遠足

分

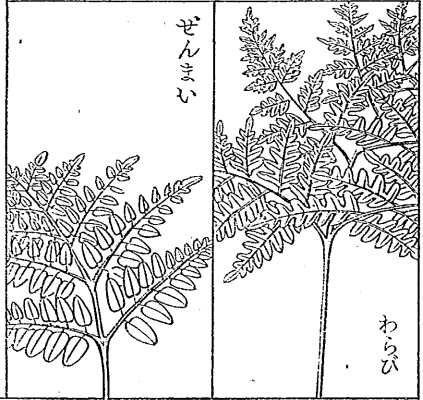
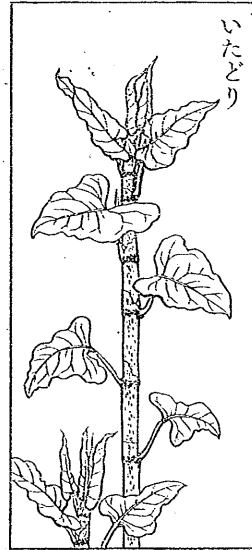
平門

と、とこの中からおき、すると、
「よいお天気です。早く起きてお出で。
とおつしやつたのではね起きました。
遠足のしたくをして、學校へ行くと、もう級
のものが大分來てゐて、先生もお出でにな
つてゐました。」

學校の門を出て西へ向ひました。平尾山の
すそへ行くと、わらびやぜんまいが、すつか

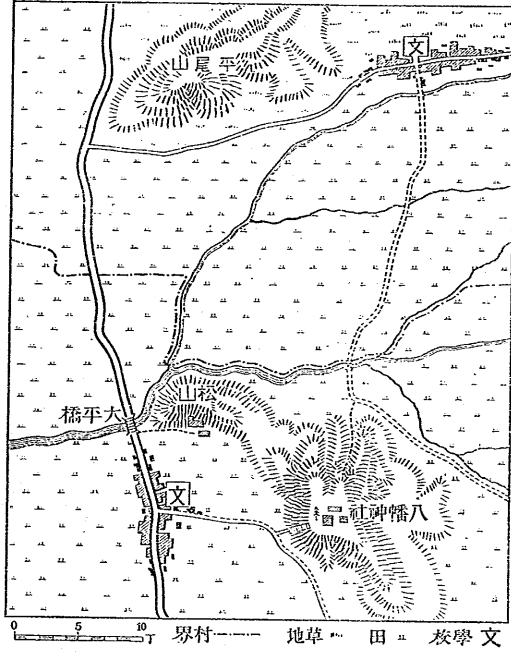
り葉になつてゐました。
いたどりは私どものせ
いほどにのびてゐまし
た。

大道へ出て、となり村の
入口へ行くと、道
ばたの立石にさ
るが三匹ほつて



匹

渡橋



ありました。一匹は目に、一匹は口に、一匹は
耳に手をあててゐます。見ざるいはざる聞
かざるとい
ふのださう
です。
大平橋を渡
つてから左
へをれて、松

瓦 此所 用 紺

山の下へ瓦やきを見に行きました。ちやうどかまを明けたところで、白いけむりが立つてゐました。

此所を出て、となり村の學校の前へ行くと、先生が「ちよつと用があるから」といつて、私どもを道に待たせておいて、學校へおよりになりました。此の時私どもの村へよく物賣に來るおぢいさんが、紺のふろしきづつ

みをしよつて來て、

皆さん、遠足かね。」

といつて通りました。

八幡^{まん}様の高い石だんを上りつめた所に、しめをはつた大きな杉の木がありました。御神木ださうです。私どもが六人で、やつとかへました。さしわたしが八尺もある。と先生がおつしやいました。

御 神 尺

先づ拜禮はいれいをして、拜殿ぐんのよこの芝しばの上で、べんたうをたべてゐると、さつきの學校の小使づゑさんが麥ゆを持つて來て下さいました。のどがかわいてゐたので、みんな大よろこびで飲みました。

先生が拜殿にかけてある繪馬ゑまのお話をし、て下さいましてから、たんぼの小道へ出て、三時ごろ學校へかへりました。

昔者

御

十一 熊襲征伐

昔熊襲くまそのかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。天皇は日本武尊やまとたけるのみことにこれを征伐せいばつせよとおほせられました。

尊は其のころ、やまとをぐなといふ御名で、御年はわづかに十六でいらつしやいました。たが、いさみ立つてお出かけになりました。

祝造

呼

お着きになりますと、間もなくたけるが新しい家を造つて、人々をあつめて、其の祝をしました。尊はかみをといて、女のすがたになり、つるぎをふところにかくして、其の家の中へおはいりになりました。大ぜいの女どもにまじつていらつしやいますと、たけるは尊を見つけて、自分のそばへ呼びました。

夜がふけて、人々はかへりました。たけるも酒によつてねむりました。此の時尊はふところのつるぎを出して、たけるのむねをおつきになりました。なみくの者なら、「あつとさけんで死にませうが、たけるも熊



襲のかしらだけあつて、

「しばらくお待ち下さい。申したいことがあります。」

といひました。尊は手をおゆるめになりました。

「あなたはどなたでいらつしやいます。」

「われは天皇の皇子^{みこ}やまとをぐな。」

あゝ、たゞ人ではおありなさらなかつた。

居

息

自分にまさる者はないので、たけると申して居りましたが、みやこには強いお方がおありになつた。今御名をさし上げます。日本武皇子と申したまへ。」

といつて、息がたえました。これから後やまとをぐなの皇子を日本武尊と申し上げることになりました。

十二 一口話

「日本一の事をくふうした。」
「何だ。」

「米をつくの、上にもうすをさかきにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。」
「上のうすには、どうして米を入れる。」
「それまではまだかんがへなかつた。」

十三 蠶

蠶

昨日からうちの蠶が上りはじめました。上

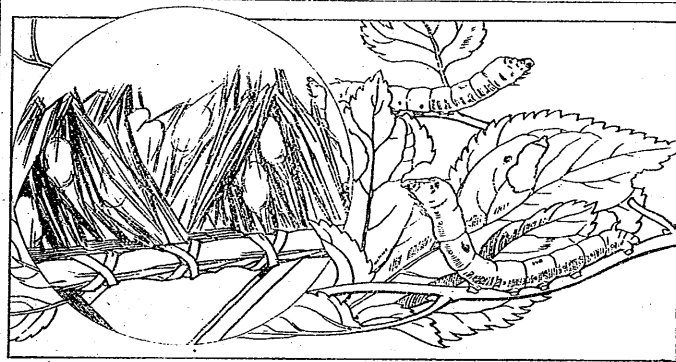
頃

桑

棚

る頃には、蠶のからだがすき通るやうになります。もう桑の葉をたべないで、頭を上げて、繭まゆをかける所をさがします。それをひろつて、まぶしへうつすのですが、少しでもおくれると、かごのうらや棚のすみなどで、繭をかけはじめますから、ちつともゆだんが出来ません。今日のお晝頃はうち中、目がまはるほどいそがしうございました。

動 吉 紙 生



まぶしには、かきくといふ音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。早いのはもう繭を作り上げてゐます。又うすい吉野紙のやうな作りかけの繭の中で、きゆうくつさうにからだをまげて、一生けんめい

所

にはたらいてゐるのもあります。まだ繭をかける場所をさがしてゐるのもあります。今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。さつきおがあさんが、

「民子、いよく今夜一ばんになつたよ。あれで八分通だ。」

と、ねえさんにおつしやいました。おかあさ

んもねえさんも、此の五六日は夜もろろくおやすみにならないのです。

十四 雨

此ノ頃ハ雨が降りツイテ、表デ遊ブ日ガアリマセン。カウ毎日降ル雨ハドウナツテシマフノデセウ。

カラカサニ降ル雨が四方へ流れオチルヤウニ、水ハ低イ方へ低イ方へと流れテ行キ

低

降

絲系

支流 雨

マス。庭へ降ル雨モ、庭ノ高イ所カラ、低イ方へ流れテ行キマス。ハジメハ絲スデホドノ流デスガ、ソレガダンくアツマツテ、ミゾニオチル頃ニハ、流モ早クナリ、水ノカサモ多クナリマス。

雨水ノ流れル道ハ地圖^{チヅ}ニカイタ川ヲ見ルヤウデス。本流ガアリマス。支流ガアリマス。低クテ廣イ所ニタマルト、池ノヤウニナリ、

其所

高イ所ニ行キアタルト、其所ヲヨケテ流レ
 マス。カウシテ流レル水ハ、ミゾカラ小川へ、
 小川カラ大河へ、流レ／＼テ海へ行キマス。
 雨水ハタバカウシテ流レルバカリデハア
 リマセン。地ノ中ニシミコンデ、井戸水や泉
 ノモトニナルノモアリ、目ニ見エナイ水蒸
 氣ニナツテ、空ヘカヘルノモアルサウデス。

十五 養老

國五

薪

腰

喜

或

昔美濃^{みの}の國にまづしい人がありました。山
 から薪を取つて來て、それを賣つて、くらし
 を立ててゐました。此の人に年取つたおと
 うさんがありまして、酒がすきでございま
 した。それで山へ行くにも、へうたんを腰に
 着けてゐて、かへりに酒を買つて來ては、お
 とうさんを喜ばせてゐました。

或日山の中で、こけに足をすべらせて、うつ

むけにたふれました。すると酒のにほひが
しますので、ふしぎに思つて、見まはします
と、石の中から酒にいた物がわいてゐます。
なめてみると、酒のあぢがいたします。喜ん



で、それから
は毎日其の
酒をくんで
来て、おとうさん

都

親孝
行

改

に上げました。

いつか此の事が天皇のお耳に入りまして、
わざく^{なら}奈良の都から美濃の國^{ぎやうかう}へ行幸に
なりました。酒の出る所を御らんになつて、

「これは親孝行のほうびに、神々がさづけ
られたにちがひない。」

とおほせになりました。又まことにめでた
い事だといふので、年^{やうらう}がうを養老とお改め

になつたと申します。

十六 日本三景

日本の國には景色のよい所がたくさんありますが、松島・天の橋立・宮島の三つを、昔から日本三景と申します。

松島は大小二三百の島が、海上三四里の間にちらばつてゐて、島といふ島には、枝ぶりのよい松がしげつてゐます。あたりの高い

景色
天
小

細
間
砂

所からもながめますが、多くは舟に乗つて、島の間を通つて見物します。晴れた日、月の夜、雪の朝、いつ見てもよい景色です。

天の橋立は海中へつき出た細長い洲^すで、長さは一里、ははは四五十間。其の洲の白い砂



面

神社
朱殿後



の上に、青い松が一面に立つてゐて、長い橋のやうに見えます。

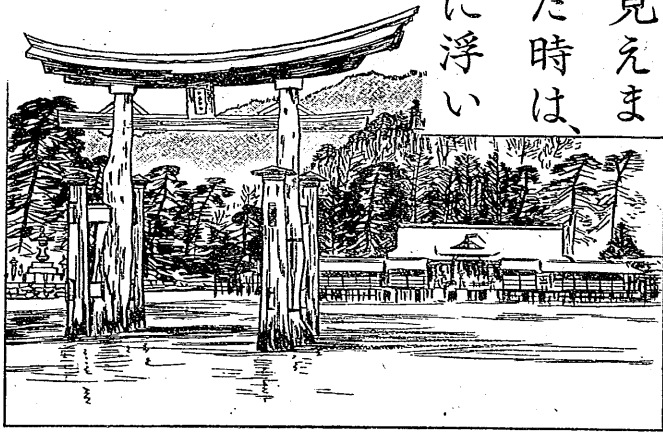
宮島はまはりが七里もある島で、島の山には鹿しかがたくさんすんでゐます。

島の東北に嚴島神社いつくしまがあります。朱ぬりの社殿が山のみどりを後にし

浮

前

て、たいそうきれいに見えます。ことにしほのみちた時は、社殿や廻廊くわいろうが海の中に浮いて、お話にある龍宮りゅうぐうはこれかと思はれます。社前の海に、日本一の大鳥居があります。



十七 虹

あれ／＼、虹が立つてゐる。
森も小山も下に見て、
向ふの田から大空の
雲までとゞく弓のなり。
だれがかけたか、虹の橋。
さて／＼、虹は美しい。

赤黄みどりやむらさきと、
七つの色をならばせて、
空のゑぎぬへ一筆に、
だれがかいたか、虹の橋。
さて／＼、虹はおもしろい。
雨のはれ間にちよつと出て、
用ありさうに天と地の

遠きをつなぐ雲の上。
だれが渡るか、虹の橋。

あれく、虹がきえて行く。
あのあざやかな色どりも
しだいにくにうすくなり、
小山の方はもう見えぬ。
だれがけすのか、虹の橋。

十八 峠から町へ

作太郎は父につれられて、はじめて町へ行きました。村ざかひの峠へ上りますと、もう町が目の下に見えます。

「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

「さう。これで中々近くはない。あのたんぼの中に、ちよつとした森があるだらう。あ

明

壁

製
絲

れは神明様の森だが、あれまでが半道で、あれから町まで一里ある。神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。



生

馬

歸

で、女工が四百人も絲を取つてゐる。うちの繭まゆもあの工場で生絲になつたはずだ。あ、町の方へ馬車が二だいかけて行きます。今日は買物もあるし、歸りには馬車に乗つて、此の下まで來てもよい。



下 兩 言

二人は峠を下りて、となり村へはいりまし
た。道の兩がはは一面に青田で、ちやうど田
の草取りのさい中です。

「うちの方では、田に水がないと言つて、さ
わいでゐますのに、此の村にはよく水が
ありますね。」

「よく氣がついた。此の村には、向ふの杉山
のすそに、大きな用水池があつて、其所か

掘

ら水を引くからだ。」

「私どもの村では、どうして池を掘らない
のでせう。」

「來年あたりから掘ることになつてゐる。
少しまはり道だが、となり村の用水池を
見て行くことにしよう。」

「用水池には大きな鯉が居ませうね。」

「鯉も居るが、それよりも、もつとお前に聞

かせて置きたい話がある。

十九 用水池

昔此の村はひどく貧乏で、此の村の名を言ふとあゝ、あの貧乏村か。と言はれたものださうだ。此のあたりの青田も、其の頃は大ていあれ地で、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。

ところが、今から百二三十年前に、此の村の

考 田

相 談

庄屋^{しやうや}が、村のことをいろいろと考へたすゑ、どうかして村のあれ地を田地にして、米がとれるやうにしたいものだと思つた。田地にするには、水がいるが、引いて来る川がない。どうしても大きな用水池を掘らなければならぬと考へた。

此の事を村の相談にかけた。村の人々は中大きな仕事だとは思つたが、さうでもし

夫

賛成

なければ、外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、みんな賛成したといふことだ。

着手

着手は來年からといふことになつて、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。物なれた人には相談をかけた。

代

いよく、其の年になつて、庄屋は普請方ふしんかたをよそからつれて來た。村の人は代り合つて、

運

一日置に普請の手つだひをすることになつた。土を掘る、石を運ぶ、桶いをうめる、土手をつく、いろくの工事に、村の人は普請方のさしづをうけてはたらいた。

幅

土手は長さが三百間、高さが六間半、幅は一番上で三間といふ大きなもくろみであつた。

「そんな大きな池がいるだらうか。」

首

と言つて、首をひねる者もあつたといふが、一年ばかりの間は、べつだんくじやうも出なかつた。氣早な者は自分の持地を田に造りかへたといふことだ。

翌

翌年の春、大雨がふりつゞいて、せつかくつき上げた土手が、半分ほどもくづれてしまつた。すると、

悪

「もくろみが悪い。」

「工夫がたりない。」

「こんなむだな仕事をすれば、貧乏村はいよいよ貧乏になる。」

などと言ふ者が出て來て、手つだひに出る者は日ましにへつた。

運

庄屋は村の者にいろく言つて聞かせて、土手をつきなほしたが、運の悪い時には悪いもので、其の年のつゆに、又土手がくづれ

夫 賃錢 身代 藏

て、池のたまり水が村の中へおし出した。かうなつては、もう庄屋の惡口を言ふ者ばかりで、普請方はとうくにげてしまつた。それでも庄屋はくじけなかつた。方々から人夫をやとつて來て、もう一度土手をつきなほした。其の賃錢をみんな庄屋が自分のふところから出した。よい身代であつたが、其のために田を賣り、畠を賣り、家も土藏も

妻 心 毎 急 植

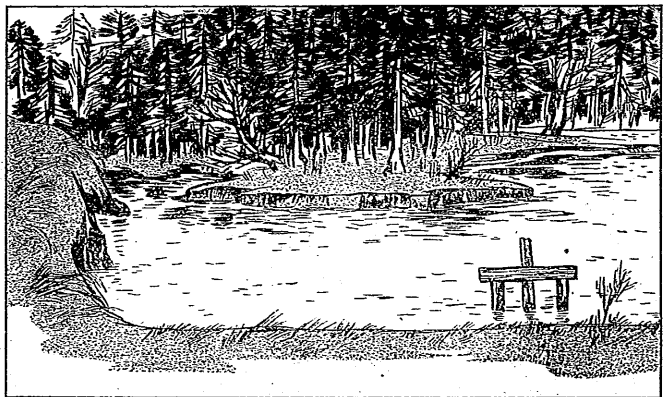
みんな賣りはらつた。しまひには妻や子ども、ものがへまでもないやうになつた。人の一心といふものはえらいもので、三度目に土手の工事はうまいつた。一雨毎に池の水はふえた。それを見て、村の人は急にあれ地を田にしだした。一冬こして、春には池の水が一ぱいになつた。六月の田植時から七月、八月にかけて、水はありあまつた。そ

苦勞

夫

こで一年ましに田がふえたが、をしいことに、庄屋は池が出来上つた年の冬、死んでしまつた。長い間の苦勞が病氣のもとであつたといふことだ。

家屋敷やしきもなく
なつた上に、夫
に死なれたの
で、庄屋の妻は



子どもをつれて里へ歸つてゐた。其の後村の人は、庄屋の家屋敷や田地を買いもどして、妻や子どもにもとの家へ歸つてもらつた。あの白壁造の土藏のある家がそれだ。親のほねをりが子の

時になつてあらはれたのであらう、あの家にはよい事がつゞいて、身代は前よりもよくなつた。

土手の此の記念碑^いに、今話した事がくはしく書いてある。此の山の杉も庄屋が先に立つて植ゑたのださうだ。

昔の貧乏村は、今郡の中でもゆびをりの金持村だと言はれてゐる。今年のひでりにも、

郡

念

此の用水池にはあんなに水がたまつてゐる。

二十 八幡太郎

八幡太郎義家^{まん}が或日安倍宗任^{あべのむねたふ}をつれて廣い野原を通りますと、狐^{きつね}が一匹とんで出ました。義家はせ中のうつばから、かりまたをぬいて狐を追っかけました。いころすのもかはいさうだと思つて、兩耳の間をねらつ

て、頭の上をすれくにいました。矢は狐の鼻のさきの地面につつ立つて、狐はころりとたふれました。

かけよつて見て、宗任が

「矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。」

と言ふと、義家が

「びつくりしてたふれたのだ。ほつて置け、」

今に生きかへる。」

と言ひました。

さて宗任がかりまたを

ぬき取つて、義家にかへ

しますと、義家はせ中を

くるりとむけて、うつぽ

へさ、せました。かりま

たは、矢じりがつ



ばめの尾のやうにわれた、たいそうするど
い矢で、宗任はつい此の間義家にかうさん
したてきの大將なのです。

「あぶないことだ。もし宗任に悪い心があ
つたら。」

と、義家の家來どもはひやくしたといひ
ます。

二十一 水見舞

叔母

舞

返

おとうさんにうかゞひますと、叔
母さんの町に大水が出たさうで
す。皆様におけがもございません
でしたか、お見舞を申し上げます。

九月七日

竹子

叔母上様

返事

お手紙をありがたう。おとうさん

報

へ電報で御返事をいたしたやうに、うちには大した事もありませんでしたが、中々のさわぎでした。九月にはいつては雨つゞきでしたが、四日の日は朝からひどい雨で、夕方から風もはげしくなりました。大水が出なければよいがと心ばいして、夜中に手をけやはき

階

物まですつかり二階へ上げました。
夜明け方になつて、雨も風もやみますと、急に川水の音がごうくと聞えて来て、間もなく火の見て半しやうをうち出しました。其の時表で水だくとさけぶこゑがしましたので、二階のまどからの

洗
叔父

ぞいて見ますと、水が表の通をきつと洗ひました。叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出ました。たちまち水が二尺になり、三尺になり、五尺にもなりました。うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、うちでも下の雨戸がたふれ

助

正男

て、中からうすやたらひがぼかぼか流れ出すほどで、どうすることも出来ませんでした。其のうち、どうやら水が二階にもつきさうになつたので、わたしは正男をつれて物ほしへ出ました。仕合はせに水はそれからふえませんでした。が、町は大てい水に

家軒

安

つかつて、人家も七八軒流れまし
た。うちでも一時は飲水やたべ物
にこまりましたが、今ではあとか
たづけも大がいすみしました。どう
か御安心下さい。
おとうさんやおかあさんには、取
りまぎれてまだ手紙も上げずに
居ります。どうぞよろしく申して

下さい。

九月十五日

叔母から

竹子様

二十二 郵便函

辻郵便

封書

私は町の辻に立つてゐる郵便函ばこでありま
す。雨が降つても、風が吹いても、夜でも、晝で
も、此所に立通しに立つてゐますが、葉書や
封書などを入れる人の外は、私のからだに

きはる者がありません。時々道を人にきいて来た者と見えて、うん、郵便函といったのはこれだなとひとりごとを言つて行く者があります。

承知
切
枚

私のやくめは、御承知の通り、皆様が私の口へお入れになる郵便物を大切にあづかつてゐて、これをあつめに來る人に渡すのであります。いかな日でも葉書の百枚や封書

通

種
商品

の三十通ぐらゐは、私の口にはいらなないとはありません。毎日かならず新聞を入れに來る方も四五人はあります。たまには雑誌や寫眞しゃしんがはいることもあります。作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、私はまだそれをあづかつたこととはありません。

私の口にはいる物は、はがきの外はきつと

品 價 刻 途

切手がはつてあります。それも品と目方に
よつて切手の價がちがひます。
郵便物をあつめる人は、毎日きまつた時刻
に來て、私のおなかを明けて持つて行きま
す。其のあつめに來る頃に、急ぎの封書を入
れに來る者が、途中で人と立話でもはじめ
ると、私は氣がもめてたまりません。もし間
に合はないと、向ふへ犬そうおくれて着く

悲 苦

からです。

葉書には、大ていちよつとした用事が書い
てありますが、封書には、いろ／＼こみ入つ
た事が書いてあります。おめでたい事やた
のしさうな事が書いてありますと、私もう
れしいと思ひますが、悲しい事や苦しさを
な事が書いてありますと、もらひ泣きをい
たします。いつか大そう雨のふるばんに、年

取つたおぢいさんが、遠方に居るむすこの
所へ出した封書や、かついで足をはらして
ゐる書生さんが、お友だちへ出した葉書に
は、私もはらわたがちぎれるやうに思ひま
した。それにはどんな事が書いてあつたか。
といふおたづねが出るかも知れませんが、
それは人にもらしてはならないことにな
つてゐます。

進

銀針

二十三 一足々々

一足々々、遠い所へ進み行き、
一くはく、廣いたんぼをうちかへす。
一針々々、金糸銀糸でぬひをぬひ、
一こてく、大きな土藏の壁をぬる。

ちりがつもつて山となり、
しづくがよつて海となる。

二十四 ブダウ

實

庭サキノブドウ棚ニ、今、夕日ガサシテヰマ
ス。フサくト下ツタウスムラサキノ實ハ、
美シイ玉ノヤウニ見エマス。モウアマクナ
ツテヰマセウ。
叔父サンノウチニモ、ブドウ棚ガゴザイマ
ス。ソレニハ黒ミノアルムラサキ色ノ實ガ
ナツテヰマス。ウチノブドウトハ種ガチガ
フノダサウデス。

種類

酒

ブドウニハ、マダイロくノ種類ガアルト
イヒマス。私ドモハブドウノ實ヲ生デタベ
マスガ、タクサン作ル所デハブドウ酒ヲ造
ツタリ、ホシブドウニシタリスルト申シマ
ス。

二十五 熊のさゝやき

二人の者が山の中を通ると、熊くまが出て來ま
した。一人は早く見つけて、木の上へにげ上

りました。一人はもうにげる間がないので、地にたふれて死んだふりをしてゐました。熊は死人には手を着けないと聞いてゐたからでございます。

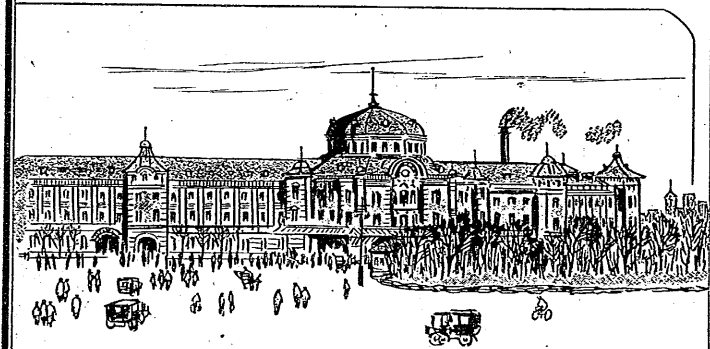
熊が来て、からだ中かぎまはしましたが、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

此の時、木に上つてゐた者が下りて来て、

「どんなにこはかつたらう。僕は木の上から見て、びく／＼してゐた。熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。」
「うん。あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつ



帝 第洋停

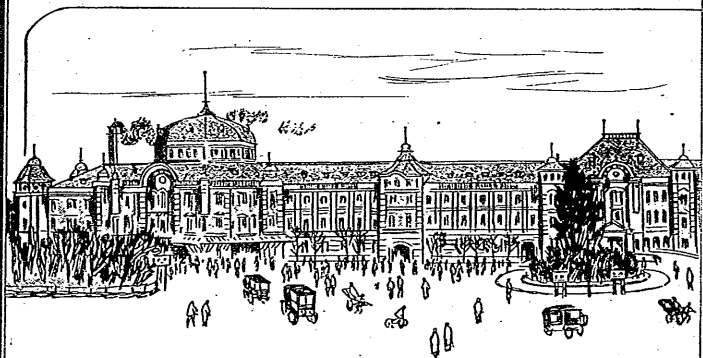


きあふな。と言つた。
 二十六 東京停車場
 東京停車場は東洋第一の
 大停車場で、宮城きやうじやうの東にあ
 ります。赤れんぐわの三階
 造で、間口が百八十四間も
 あります。向つて右が入口、
 左が出口で、まん中が帝室

二十六 東京停車場

百

洗 賣替 局央 左 役
 右



用になつてゐます。
 停車場の階上には、役所も
 ホテルもあります。階下の
 入口には、左右に大きな待
 合室があつて、此の外に中
 央郵便局の分室もあれば、
 兩替店や、いろくのの賣店
 もあります。又洗面所もあ

二十六 東京停車場

百一

國五

國五

K130.8-3-5

二十六 東京停車場

百二

力動 發降

れは食堂しよくだうもあります。

此の停車場から、毎日七八千人づつの人
 乗降りします。汽車の發着時刻が近づくと、
 自動車馬車人力車がいくだいたなく、入口
 出口によつて來ます。

はじめて東京見物に來て、此の停車場へ降
 りる人は、大てい先づ第一に宮城をさして
 まるります。

をはり

國五

大正八年 八月廿五日 翻刻印刷
 大正八年十二月五日 翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

翻刻發行
兼印刷者

東京書籍株式會社

代 表 者

原 亮 一 郎

印 刷 所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

大正八年八月廿八日
 文部省檢査濟

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
 株式會社 國定教科書共同販賣所

尋常小學國語讀本 卷五

定價 金九錢
 臨時定價 金拾五錢